ゆう気のしるし

小　三

ぼくの弟は、小さい時にやけどをしてしまいました。弟は、手じゅつをしないと命があぶなくなり、頭、うで、太ももも、おなか、せなかの皮ふのいしょく手じゅつをしました。そして、体中があみもようになってしまいました。

今考えると、その時、弟は、いたくて苦しくてとてもつらかったと思います。しかし、ぼくは、それを見てわらってしまいました。でも、お母さんが、

「このあみもようは、やけどにたえたゆう気のしるしなんだよ。」

と教えてくれました。

それまでは、あみもようはほかの人にはないものなのでおかしいと思っていました。でも、お母さんの言葉で、やけどにたえてがんばった弟がかっこよく思えました。そして、そんな弟をぜったい守りたいと思いました。

もし、弟のやけどのあとをわらう人がいたら、ぼくがゆう気のしるしだと教えます。いやなことを

言う人がいたら、やけどにたえた弟のかっこよさを教えます。ぼくがかならず、大人になるまで守りつづけたいです。

考え方や感じ方は、人によってさまざまですが、考え方や感じ方をかえるだけでよくなることがあります。

だから、ぼくは、見えているものがすべてではないと思います。悪いものやいやなものが、考え方一つでよいものやすきなものになります。ぼくがおかしいと思っていたやけどのあとが、ゆう気のしるしに思えたように、これからは、弟以外にも、体がふ自由な人やしょうがいのある人に出会ったら、助けたいです。